

# 東遊運動後のファン・ボイ・チャウにおけるアジア 連帯論と仏越提携論

## Asian solidarity and an alliance between France and Vietnam in Phan Boi Chau after the Dong Du Movement

今井 昭夫  
IMAI Akio

東京外国語大学大学院総合国際学研究院  
Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

はじめに

1. 東遊運動直後のファン・ボイ・チャウのアジア連帯論
2. 第一次世界大戦後のファン・ボイ・チャウ
  - 2.1. 第一次世界大戦後から 1920 年代前半のファン・ボイ・チャウ
  - 2.2. 1920 年代後半以降のファン・ボイ・チャウの仏越提携論
  - 2.3. 1920 年代以降のファン・ボイ・チャウのアジア連帯論
  - 2.4. ファン・ボイ・チャウにおける社会主義的連帯

おわりに

キーワード：ファン・ボイ・チャウ、アジア連帯論、仏越提携論

Keywords : Phan Boi Chau, Asian solidarity, Alliance between France and Vietnam

### 【要旨】

本稿では、一部で言われているように東遊運動直後のファン・ボイ・チャウは日本を「アジアの敵」と見なしていたわけではなく、「日中合心」論を唱えていたことを新資料を通してまず明らかにする。第一次世界大戦後、チャウは仏越提携論を唱えるようになり、1920 年代にはアジア連帯の主張は希薄になっていくとともに、社会主義的連帯についての考えも窺えるようになった。フェ軟禁後、公的な場ではチャウは仏越提携論を唱えることが多かったが、それはいわばチャウにとっての「顕教」であった。一方で、晩年の著作『滅種予言』に見られるように反仏的な考えは維持され、そこでは華越同盟が唱えられており、これがいわばチャウにとっての「密教」であったと考えられる。



Phan Boi Chau, a leading Vietnamese nationalistic activist who was prominent at the beginning of the twentieth century, continued to advocate Asian solidarity, focusing on the idea of cooperation between Japan and China, even after he was deported from Japan and the Dong Du Movement was defeated. After the First World War, he began to advocate the idea of an alliance between France and Vietnam. In the 1920s, Chau was involved in a variety of ideological movements, including the doctrine of non-violence and socialism, while his idea of Asian solidarity became diluted. Later in his life, the idea of an alliance between France and Vietnam as “exoteric idea”, and a theory of socialism and the idea of an alliance between China and Vietnam as “esoteric idea”, appear to have coexisted in his mind.

### はじめに

ベトナムの20世紀初頭の民族運動を牽引した二大巨頭はファン・ボイ・チャウ (Phan Bội Châu : 1867 – 1940) とファン・チュー・チン (Phan Chu Trinh : 1872 – 1926) である。この並び称される二人は運動の路線も対照的に捉えられてきた。ファン・ボイ・チャウが「暴動(暴力革命、武装闘争)」で「排仏(フランス排除)」であるのに対し、ファン・チュー・チンは「改良」で「依仏(フランス依拠)」だとされる。つまりチャウは武装闘争によってフランス植民地体制を打倒しようとしたのに対し、チンはフランスに依拠して国内改革、とりわけ封建的な王朝制度の改革や民主化・欧化を推進していこうとしたとする。ファン・チュー・チン自身の評価では、チャウは「革命党」で自分は「自治党」だとしている(『仏越連合後之越南』)[Thắng 1992 : 260]。

旧北ベトナム時代から統一ベトナムの1980年代ぐらいまでのベトナムの歴史学界・論壇においては、ファン・ボイ・チャウの「暴動」路線の方が圧倒的に高い評価をうけていた。ドイモイ下、冷戦が終わり多極的外交と市場経済化が進められていくなかで、1990年代に入るとファン・チュー・チンの評価が相対的に高まってきた。現在ではむしろチャウを上回っているともいえる。2016年にオバマ米大統領が訪越した時の5月24日の演説のなかで、ベトナムの民族運動に言及した時、ファン・ボイ・チャウの名前は挙げられず、ファン・チュー・チンの名前を挙げて称賛していた(VietnamPlus 25-05-2016)のは意味深長である。

さて、本研究ノートは、東遊運動後(1909年以降)のファン・ボイ・チャウにおけるアジア連帯論的要素の消長を、仏越提携論などとの関係で捉え直そうとする試みである。周知のように東遊運動はチャウが中心となって1905年から1909年まで展開された日本留学運動で、約200人のベトナム人青少年が日本に留学し、20世紀初のベトナム民族運動に大きなインパクトを与えた。現代ベトナムの研究者グエン・ティエン・ルックが指摘するように東遊運動には3

つの側面があった[Lຸຸc 1994:19]。①留学運動、②チャウの著作活動、③アジア革命との接触・連携、である。東遊運動中にファン・ボイ・チャウをはじめとするベトナム人が日本でアジア各国の活動家と交流をもち、「東亜同盟会」や「滇桂越連盟」などの組織に参加したことについては、白石昌也[白石 1981 a、1981 b、1982、1993]をはじめ多くの研究者が既に言及しているので、本稿においては深く立ち入らない。本稿では東遊運動後の動きについて主に扱うことにしたい。

1907年に日本政府はフランスとの間で相互に植民地主義的権益を尊重しあう日仏協約を締結し、東遊運動を弾圧するにいたった。東遊運動を指導していたファン・ボイ・チャウおよび阮朝皇族の畿外侯クオン・デ(Cường Đê : 1881 – 1951)らは日本追放の憂き目にあった。日本を去るにあたって、ファン・ボイ・チャウは当時の小村寿太郎外相に書簡を送り、日本政府への不満を述べている[アジア歴史資料センター(以下、アジ歴と略記) 1909]。これをもって、日本追放後、チャウは日本に敵対意識をもったとする意見がある。たとえばベトナム国内の研究ではホー・ソンが「日仏協約締結(1907年6月)と日中越の革命家との交流により、チャウは1907年後半から、日本を友人と見なくなり、敵とした」[Hò Song 1995 : 87]という意見を紹介している。また、近年刊行の日本の書物では、ベトナム研究の専門書ではないが、[岩崎 2017 : 81]では「1909年に日本を去ったファンは、その後、日本を欧米諸国と同じ、アジアの敵とみなすようになった」と書かれており、同様の記述は[山室 2001 : 619]や[中島 2014 : 316]にもみられる。確かに、チャウが日本を追放される時に送った小村外相への書簡において、彼は日本の外交政策を批判し、クオン・デの追放ばかりでなく、フランスに屈服し、ベトナム民族運動を安売りしたことを批判していた。しかしチャウは日本を「アジアの敵」とみなすまでになっていたのであろうか。本稿は第一にその点を検討していきたい。

第二に、ファン・ボイ・チャウの仏越提携論について扱う。第一次世界大戦後、チャウは1918年に『仏越提携政見書』を公表し、それまでの反仏武力闘争ではなく、逆にフランスとの協力を唱えた。チャウの「暴動」的側面がベトナムでは高く評価されてきた時期が長かったため、彼の仏越提携論については、「暴動」路線からの逸脱や後退として捉えられ、ベトナム国内では政治的にセンシティブな問題だと忌避されあまり触れられてこなかった。本稿では、チャウの仏越提携論を単なる「逸脱」としてではなく、チャウにおけるアジア連帯論などと仏越提携論の相互関係のなかで捉え直してみたいと考えている。

## 1. 東遊運動後のファン・ボイ・チャウのアジア連帯論

上述したように、チャウは小村外相への書簡のなかで、確かに「東洋黄種人」「亜洲黄種国」で「文明国」の日本がクオン・デを追放するなどの外交政策についての批判を述べてはいた。

しかし日本を「アジアの敵」とまでは明言していないことをまず確認しておきたい。また日本への批判は「東洋黄種人」「亜洲黄種国」で「文明国」の立場を取らず「アジアの長兄」としての責任をまっとうしないことを責めているのであって、日本の植民地主義的性格に向けてではない。以下では、東遊運動直後のチャウが、日本を必ずしも敵対視していなかったことを具体的に示したい。

東遊運動後のチャウのアジア連帯論に関する考えを窺うことのできる著作として『聯亜蕪言』(1911年)がある。この著作の原本は散逸して見つかっていないが、おおよその内容については、ファン・ボイ・チャウ自身が著作『獄中記』(1914年)と『自判』(あるいは『潘佩珠年表』(執筆時期不明。1920年代後半以降)のなかで述べているので、よく知られている。ちなみに『獄中記』ではこう書かれている。

「(辛亥の年) 11月下旬香港に至り、諸同志もまた多くこの地に來ました。この時私に『聯亜蕪言』の著があります。これは日支両国互いに協心同力して、全アジア大局の改造に当たることを希望したものであって、…」[長岡・川本 1966 : 146]

また『自判』ではもう少し詳しくこう書かれている。

「中華必繼日本而大強、苟日中二国皆注全力於対歐。則不惟我越南、而印度菲律賓且相繼獨立有期矣。余將回華。且再東渡、謀為合従之運動。乃於田時之暇、首起草一小冊。名曰、聯亜蕪言。全文数万言。極言中日同心之利益。與不同心之損害。書既草完。先寄書於華党諸旧識。祝賀成功、且微示以余願回華之意。諸故人如章炳麟、陳其美、謝英伯等皆有書勸余來。余以田所事務一委於午生、子敬二人。統率田友凡五十余人、仍理旧業。而余偕同志数人至曼谷訪華暹新報主筆肅仏成。肅為中華革命党住暹機關之主要人也。見余所著聯亜蕪言。為余付印一千本。日本人僑暹者、大為歡迎。購読至三百本。存七百本、以少数分贈華僑。餘悉携之赴華」[内海 1999 : 289]。

上記の2つの著作からすると、『聯亜蕪言』はファン・ボイ・チャウが日中合作を主張していたものだといえる。チャウのこの主張は後の著作『亜洲之福音』(1921年)でも展開されている。このことは『自判』のなかで次のように述べられている。

「此書一中冊專為發揮連絡亜洲之政策。而主意則在於日中之同心。大略與聯亜蕪言同。然此書出現於中日感情既壞之後。故効力不能發生。此種著作、実間接與革命有關係」[内海 1999 : 312]。

以上のように、ファン・ボイ・チャウのアジア連帯論の考え方を示すと思われる『聯亜蕪言』と『亜洲之福音』の2つの著作について、上の自伝的著作によって内容の概略は知られているものの、『ファン・ボイ・チャウ全集』1990年版と2001年版にも収録されておらず、これまで原文を読んで確認することはできなかった。

昨年、筆者は『聯亜蕪言』を紹介している新聞記事を見つけることができた<sup>2)</sup>。それは『順天時報』に中華民国元年(1912年)9月24日から9月29日まで5回にわたって掲載された記事で、牟樹滋が書いた「読聯亜蕪言有感」である。『順天時報』は1901年から1930年まで北京で発行された日本人経営の中国語新聞である。1905年に同紙は中島真雄(1859-1943)によって日本外務省(駐華公使館)に譲渡されその管轄下に入ると、日本政府の対中政策と密接な関わりを持つようになった。その後、辛亥革命、袁世凱政権、段祺瑞や張作霖などの諸政権の時期を経て、国民党による北伐が完了すると、同紙は排日運動の標的となり、1930年3月にいたって、外務省の方針のもと廃刊された。この新聞の論説の寄稿者は、日本人だけではなく、中国人も含まれていた。中国人と思われる牟樹滋も主要な論説寄稿者の一人であった[青山・関 2017: 301-331]。記事「読聯亜蕪言有感」は、名前も知らないアジア人から送られてきた『聯亜蕪言』を牟樹滋が読んで、その主張に共鳴して紹介するというものである。この記事は全5回・472行のうち、282行(約60%)が『聯亜蕪言』からの直接の引用である。このように引用が多いので、原本『聯亜蕪言』の一端を知ることは十分に可能である。この記事で引用されている『聯亜蕪言』は上述したファン・ボイ・チャウの執筆した『聯亜蕪言』であると筆者は考える。その理由は以下の通りである。

①チャウの『聯亜蕪言』は1911年に執筆・刊行されており、『順天時報』に掲載された記事は1912年9月で、時期的に矛盾がないこと。

②新聞記事の筆者・牟樹滋は、名前の知らぬアジア人が送ってきた本であると紹介しているので、原作者はアジア人で中国語(漢文)が書ける漢字文化圏の知識人であること。

③引用文のなかで、日中が「越緬印暹(ベトナム・ビルマ・インド・シヤム)」のアジア国々を先導していくとの文言があり、朝鮮について述べられている箇所がないので朝鮮人が筆者とは考えにくい。また「安南」のほかに「越南」という言葉も使用されており、筆者はベトナム民族運動家の可能性が強い。

④内容的に「日中同心」の利が説かれ、「日中同心会」設立が主張されていて、『獄中記』や『自判』で紹介されている『聯亜蕪言』の内容と文言が合致している。

以上から、筆者は記事「読聯亜蕪言有感」のなかに引用されている『聯亜蕪言』はファン・ボイ・チャウの著作だと考える。もしそうであるならば、チャウと『順天時報』の関係はいかなるものだったのであろうか。上述の通り、1907年の日仏協約以後、チャウは日本を敵対視するようになったとの見方もあるが、『聯亜蕪言』のなかで、チャウはアジアの連帯においてまだ日本に期待をしており、この著作を通して日系新聞社に働きかけようとしていたと考えられる。よく知られているように、東遊運動を日本で支援したのは、アジア主義の団体・東亜同文会(1898年設立)であった。『順天時報』の初代社長の中島真雄は東亜同文会に所属しており、同紙

は東亜同文会の強い影響のもとにあった。東亜同文会の人脈を通して、『聯亜蕪言』が『順天時報』に紹介されるに至ったのではないかと考えられる。以上から、チャウが1911年に執筆した『聯亜蕪言』は「日中同心」を説いたものであり、彼は「日中同心」をアジア連帯の要として考えており、思想的・人脈的に日本と完全に断絶し敵対視していたとは考えにくい<sup>3)</sup>。

辛亥革命後、チャウは中国で活動が続けていくことになるが、1912年には、これまでの維新会にかわってベトナム光復会を結成し、立憲君主国ではなく民主共和国を目指すこととなった。同年、振華興亜会を結成し、広東人鄧警亜が会長、ファン・ボイ・チャウが副会長に選ばれた。この会則では、「第一、ベトナムの援助」、「第二、インドおよびビルマの支援」、「第三、朝鮮の援助」が定められ、また一たび中国が国権回復の暁には、隣邦援助の砲声の第一発はベトナムからあげられることを可決した〔内海 1999:175〕。この会の宣言書では、「首段極言中華地大、物博、人衆、甲於全亜洲。又為東方文化最古之國。當為全亜洲之兄長。決無可疑。欲舉全亜洲兄長之責。當以扶植亜洲諸弱小國為獨一無二之天職」〔内海 1999:294〕と書かれている。東遊運動期は日本が「アジアの長兄」とされていたが、今やそれは中国がその位置を占めるようになった。韓国の研究者 Dae-Yeong Youn によれば、振華興亜会結成の翌月(1912年9月)、ファン・ボイ・チャウと盟友グエン・トゥオン・ヒエン (Nguyễn Thượng Hiền: 1868 - 1925) は上海で中国人や日本人を参加させるための「世界人道会」を設立した。また翌1913年には、四国同盟(ベトナム、朝鮮、日本、インド)が結成された、という〔Youn 2009:43〕<sup>4)</sup>。このようにこの時期のチャウのアジア連帯論において、日本はかつての盟主の扱いではなくなったものの、日本は排除されていなかったのである。この後、ファン・ボイ・チャウは1914年初から1917年2月まで広東で獄中につながられることになり、彼のアジア連帯運動は挫折した。

チャウのアジア連帯論をヴィン・シンは「儒教的世界観の枠組み」によるものと指摘している〔Vinh Sinh 1992:32〕。確かにその対象は地域的には儒教圏を中心としているがそれに限らずビルマ、インドまで広がっている。チャウにはインドシナという地域意識はあるが東南アジアという地域概念はまだ見られず、そのアジア連帯論は中東のイスラーム圏にまでは及んでいない。また被抑圧の構図を白色人による黄色人に対するものとし、「人種」に紐帯の鍵を求めているのが特徴である。

## 2. 第一次世界大戦後のファン・ボイ・チャウ

### 2.1. 第一次世界大戦後から1920年代前半のファン・ボイ・チャウ

第一次世界大戦が終結した後の1918年にファン・ボイ・チャウは『仏越提携政見書』(元漢文では『法越提携政見書』だが、本稿では「仏越」とする)〔Toàn Tập 5 2001:197-206, 555-574〕を書き、それまでの対仏武力闘争の主張を180度転換した。自伝の『自判』によれば、レ・ズー(Lê

Dur : ? - 1967) とファン・バー・ゴック (Phan Bá Ngọc : ? - 1922) に使喚されて執筆したとしている。『政見書』の内容は、日本の脅威による在インドシナのフランス人の5つの危険とベトナム人の3つの危険を指摘して日本の台頭と脅威を強調し、日本の軍事的脅威を前に、フランスはインドシナにおいて日本軍に対抗できず、またベトナムにとって日本が侵略するとベトナム民族は滅亡するので、双方の共存をはかるために協力する必要があるとする。そのためにはフランスはベトナム人を牛馬のように見ないで、しかるべく扱い、ベトナム人はフランス人を敵と見ずに、師やよき友とみるべきだとしている。チャウは『政見書』を執筆したものの、実際にはチャウとフランス植民地当局の交渉は決裂し、チャウはサロー総督からの懐柔的申し出を断った。しかしこれ以降、「暴動」路線が揺らぎだしたことは確かである。

チャウの武装闘争からの離脱は『予九年来所持之主義』(1921年)[Toàn Tập 5 2001 : 207-222]でも明確にされている。ヴェルサイユ講和会議後に書かれたこの著作のなかでは、ウィルソン主義が世界的に鼓吹されている状況のなかで、「暴力革命」ではなく「文明革命」が真正な独立への道だとされ、「暴力革命」を捨てて文明化をはかり、独立を達成していくことが主張されている。それが仏越双方にとって幸福だという。「日本は強国だと承知しているが、彼らも自分たちと一緒にアジアの種である。われわれはこの毒を以て他の毒を除去した方が、手をこまねいて死を待つより遥かにいい。それは私がこの9年間考えてきたところであるが、最善の方針は『種を選んで時を待つ』説である。今後万一その説が実行できなければ、はじめて『毒を以て毒を制す』説を用いる」[Toàn Tập 5 2001 : 217]としている。

さらに『ガンディー』(1922年)[Toàn Tập 3 1990 : 493-502]あるいは『医魂丹』(1922年)Toàn Tập 5 2001 : 223-239]では、インドのガンディーの非暴力による平和革命を称賛している。「暴力による革命は暴虐さを少しも減じることなく、逆にそれは他の暴虐行為を生み出すだけ。そのため力や暴力によるすべての方法に私は反対する」[Toàn Tập 5 2001 : 238]と述べている。『天乎！帝乎！』(1923年)[Toàn Tập 5 2001 : 241-315, 575-631]は、フランスの植民地支配の苛酷さを断罪したものであるが、この著作では独立の目的については言及されず、「ヴェトナム人の要求はすなわち、ただ天賦人權の一小部分のみである」[長岡・川本 1966 : 204]とされているだけである。以上で見えてきたように、1917～1923年の時期、ファン・ボイ・チャウは仏越提携論を唱え、サロー総督の申し出は拒否したものの、武装闘争から非暴力革命へと路線を変えたのである。

チャウが仏越提携論を唱えるようになったことについては、研究者の間でさまざまな意見がある。とはいってもベトナム国内では政治的に繊細な問題、いわばチャウの「暗黒史」なので、ファン・ボイ・チャウにかんする研究は汗牛充棟であるのに、この問題について真正面から言及したものはいたって少ない。ベトナム近代思想史研究の礎を築いたチャン・ヴァン・ザウは、

『仏越提携政見書』によってチャウは「暴動革命路線」を捨て、その後の『ファム・ホン・ターイ伝』（1924年）、「ベトナム国民党の声明書」（1924年）などで暴力革命路線に復帰し社会主義への模索が見られるものの、逮捕された1925年以降、フエ軟禁時代には仏越提携論思想に戻り、第一次大戦後、チャウはもはや民族民主革命の旗頭ではなかったとする〔Giàu 1975 : 422-437〕。チャン・ヴァン・ザウは、暴力革命があくまでベトナム革命の主流であり、仏越提携論はそれからの逸脱であり、それをチャウが唱えたことはチャウの思想的後退だとする。『ファン・ボイ・チャウ全集』の編纂者でファン・ボイ・チャウ研究の第一人者チュオン・タウは、チャウが仏越提携論を唱えたのは戦術的な問題(裏をかく作戦)だという。チャウは復讐の志を堅持し、革命の進展を期するためにフランス側とデタントをしたのだという。実際には、サロー総督の懐柔策にチャウは乗ることはなく、志士の立場を変えなかった。晩年にチャウは仏越提携論に戻ったとする見方もあるが、チャウの公刊本のなかでは仏越提携論には言及しておらず、またフランス人高官との会見で仏越提携論に言及しているのは、社交辞令であって彼の真意ではないとする〔Chương Thâu 2012 : 318-322〕。チュオン・タウもチャウの暴力革命路線を高く評価し、それがチャウでは一貫されており、仏越提携論は戦術的な作戦にすぎないとしている。現代ベトナムの研究者グエン・ディン・チューは、チャウにとって民族独立が唯一の目的であって、どの主義も手段にすぎないとし、チャウは「暴動」一辺倒ではなく「暴動」と「改良」の両側面があり、状況によって使い分けてきたのだという〔Chú 2008:22-27〕。グエン・ディン・チューにおいては、チャン・ヴァン・ザウやチュオン・タウと比べて「暴動」の価値が相対的に低くなっており、チャウにおける「改良」的側面を肯定的に捉えるようになってきている点が前の二者とは異なる。

このようにチャウの仏越提携論は従来、「暴動」か否かの基準によって主に議論されてきたが、本稿では、アジア連帯主義などとの関係によって再考しようとするものである。チャウの民族運動・独立闘争は、ベトナムの民智が低く実力がまだ十分でないという現状認識の下で、どこに国に支援してもらうかが常に問題意識としてあった。求援先は、「同文同種」、「同病」から選ぶこともあったが、「敵の敵は味方」といったマキャベリスティックに選択される面もあった。これによってチャウの思想的変遷を整理してみると、1905年の東遊運動期は日本とアジア、東遊運動直後は日中合作とアジア、辛亥革命後は主軸・中国とアジア、第一次大戦中はドイツとアジアであり、第一次大戦後にチャウの方向性は混迷する。1918年に仏越提携論を出す一方、ロシア十月革命にも関心をもち、1920年には布施勝治の『露国革命記』と推定される本を翻訳している(『俄羅斯真相調査』)<sup>5)</sup>。1922年には『亞洲之福音』を書いて依然として日中合作も説いている。もっとも日中間の摩擦により実現が難しくなったとしているが。こういった混迷は、1924年にファム・ホン・ターイ (Phạm Hồng Thái、1896 - 1924) によるメルラン総督暗殺未

遂事件が広州で発生するまで続く。チャウはこの事件をきっかけに、ふたたび思想を過激化させ、光復会からベトナム国民党への改組に動いた。しかし翌年、フランス官憲によって逮捕されてしまい、ベトナムでの裁判を経た後、フエに軟禁となり、民族運動の第一線からの退場を余儀なくされる。とはいえ、その後もチャウは思索・執筆・講演活動をやめたわけではなく、むしろ旺盛な活動を続け、隠然たる影響力を持ち続けた<sup>6)</sup>。

## 2.2. 1920年代後半以降のファン・ボイ・チャウの仏越提携論

このように第一次大戦後から1920年代前半の混迷期を提携・支援対象という点から整理すると、その後のチャウが想定する対象には3つの可能性が考えられる。一つはフランスである。二つは、中国を中心とするアジアである。三つは、ロシア革命直後のソ連である。チャン・ヴァン・ザウによれば、フエ軟禁後の1926年に「全国に通告する宣言書」でチャウはあらためて仏越提携論を提唱した[Giàu 1975: 424]。これ以降、とりわけ1930年代に入って(中断期があるが)、公開の刊行物においてチャウは仏越提携論を提唱する書簡・記事を再三寄稿している。『ファン・ボイ・チャウ全集』に所収されているものだけでも、①「仏越提携について L'ANNAM 紙のインタビューに答える」(時期不明)[Toàn Tập 7 2011: 30-31]、②「インドシナ総督に送る書簡」(1929年9月11日付け)[Toàn Tập 7 2011: 432-436]、③「ポール・レイノー植民地大臣に送る書簡」(1931年10月付け)[Toàn Tập 7 2011: 446-452]、④「ヴァレンヌ氏と会談した一時間」(『民の声』紙1937年3月2日)[Toàn Tập 7 2011: 507-510]、⑤「仏越提携主義を実行しなければならぬ」(『長安』紙1938年8月23日付け)[Toàn Tập 7 2011: 514-516]、⑥「階級闘争問題に関して」(『長安』紙1938年10月7日付け)[Toàn Tập 7 2011: 517-519]、⑦「私たちは誰のためにここを守るのか」(『旬礼』紙1938年10月15日付け)[Toàn Tập 7 2011: 520-521]、⑧「シャテル理事長官に送る」(『東法』紙1939年3月13日付け)[Toàn Tập 7 2011: 521-522]。真意なのか裏をかく作戦なのかはおくとして、1930年代は仏越提携論で一貫しているかのようなのである。もっとも軟禁状態という制約のなかで発表されたものであることを勘案する必要はあるであろう。チャウの仏越提携論は、日本脅威論・「文明革命」と表裏一体となっており、かつての「人種」の観点はなく、仏越によるインドシナの地域的防衛という観点がとられている。ファン・チュー・チンの仏越連合論と比べると、軍事的観点が強く、文化的・経済的観点が弱いのが明らかである。チャウは最晩年、「仏越提携論、上下一心、労資互助」というスローガンを掲げ、仏越間、民族内、階級間の団結を強調している。

## 2.3. 1920年代以降のファン・ボイ・チャウのアジア連帯論

次が、中国を中心とするアジアである。『亜洲之福音』以降、アジアの連帯を唱えるチャウの

著作は目立たなくなる。ではアジア連帯的要素はチャウにおいて、なくなってしまったのだろうか。以下で、これまでファン・ボイ・チャウの著作では扱われたことのない、著作を紹介し、その点について考察してみたい。

それは「この事実を見よ 救主の再臨を待つ 越南三千万の東洋民族」という新聞記事である。この記事は、日本の『人類愛善新聞』の1929年1月13日、1月23日、2月3日の3回にわたって連載された日本語の記事で、全部で458行あり、寄稿者名は「越南 潘是漢」と記されている。潘是漢はいうまでもなく、ファン・ボイ・チャウの別名である。この記事の内容は、ベトナムにおけるフランス植民地支配の苛酷さを、カトリック教会、奴隷教育、刑律、税制・専売制度、官吏任用制度などの点から批判したもので、『越南亡国史』(1906年)や『天乎! 帝乎!』(1923年)などと共通するものがある。内容については特に目新しい点はないが、第一次世界大戦や1920年の出来事に触れられているので1920年代に書かれたものであることは間違いない。この新聞記事について、注目すべき点として次の3点が挙げられる。

① 1929年という時期。この時、チャウは既にフエで軟禁中であつた。したがってフエから日本の新聞に寄稿することが本当に可能であつたのかどうか、さらに検討する必要がある。

② 掲載紙について。『人類愛善新聞』は、日本の宗教団体大本教が発行していた新聞である。宗教団体の機関紙なのでかなり特殊である。大本教の傘下組織である人類愛善会の総裁・出口王仁三郎(1871-1948)は、1923年に中国の紅卍会や朝鮮の普天会などの宗教団体と提携する一方、中国東北部やモンゴルへの進出をはかり、日本のアジア主義者とのつながりも強かった。1936年にはベトナムのカオダイ教とも連携関係を結んでいる。

③ この新聞記事は日本語で書かれており、翻訳者がいたと思われるが、記事には翻訳者の名前は記されていない。一体、チャウと大本教をつないだのは誰で、どのような経緯でチャウはこの宗教団体の新聞に寄稿したのであろうか。

ファン・ボイ・チャウの著作が日本語に訳されて出版されたのは、『天か帝か』が1928年に南溟生によって、『獄中記』が1929年に南十字星によって翻訳されたものが最初である。『人類愛善新聞』の上記記事とほぼ同じ時期である。これは単なる偶然の一致とは思えない。南溟生については人物が特定されていないが<sup>7)</sup>、南十字星については何盛三(1885-1951)だとの説が有力である。盛三は、1929年に東京に住んでいた畿外侯クオン・デの数少ない来訪者だといわれている[長岡・川本 1966: 92, 279-280]。この何盛三がファン・ボイ・チャウとカオダイ教をつなぐ重要な役割を果たしたと筆者は考えている。

何盛三は、海軍軍人・赤松良則の三男として生まれた。父の赤松良則は、日本最初のアジア主義団体とされる興亜会の創立者・曾根俊虎(1847 - 1910)の『法越交兵記』(1886年)に序文を書いている。盛三は15・16歳の頃、長崎の唐通事(中国語通訳)だった家柄の何家の養子に

なる。1916・17年頃から中国語やエスペラント語に習熟するようになり、中国に何度か渡ったり、中国語の文法書(『北京官話文法』1918年)を出版したりしている。盛三は1918年に結成された思想研究会・老壮会に入るが、この会にはアジア主義者で有名な満川亀太郎(1888-1936)や大川周明(1886-1957)がいた。また『順天時報』の前社長亀井陸良(1871-1923)も会員であった。1919年に結成されたアジア主義の団体猶存社には満川亀太郎、北一輝(1883-1937)、西田税(1901-1937)といった著名なアジア主義者とならんで、何盛三も名前を連ねていた。その中で、満川亀太郎は東遊運動の残留ベトナム人でクオン・デの側近だった陳福安(Trần Phúc An)<sup>8)</sup>と密接な交流をもっていた。満川の日記に陳福安の名前が最初に登場するのは、1926年1月23日である[満川2011:71]。満川が1930年に創立した興亜学塾職員名簿には外国語講師として陳福安の名前が記載されている。また陳福安は西田税とも交流を持ち、1922年に二人は熱く語り合ったことが西田の自伝に記されている[宮崎・内田・西田・大川1982:327-328]<sup>9)</sup>。

1924年にアメリカで「排日移民法」が制定されると、日本では反米的でアジア主義的な言説が巷にあふれるようになり、「排日移民法」に反対する団体なども結成された。全亜細亜協会もその一つで、この協会は1926年に長崎でアジア各国からの代表を招いて全亜細亜民族会議を開催した。この会議で、クオン・デはベトナム代表としてベトナムの窮状への各民族からの援助を要請している。また、陳福安は同協会の機関誌『アジア』の1926年4月号に「仏国統治下に於ける越南国情」[アジ歴1926]という論文を寄稿している。このような状況のなかで、アジア主義者のベトナムへの関心は高まり、満川、西田らアジア主義者とクオン・デや陳福安との交流の輪の中に何盛三もいて、盛三は『獄中記』の翻訳をするようになったのだと推察される。盛三は、1930年には中国の広東に行き、広東や雲南のベトナム人政治活動家との接触を試み、日本の在広東総領事館の取り調べを受けている[アジ歴1930]。

何盛三はまた、日本エスペラント学会(1919年設立)の重要な活動家の一人であり、エスペラント普及活動に熱心であった。1922年には、文学博士・黒板勝美、柳田国男と三名連記で、日本エスペラント弁務局の設立申請をおこなっている[アジ歴1922]。満川の日記によれば、何盛三は1931年10月より、満川が主宰する興亜学塾でエスペラント語の講義を担当している[満川2011:167]。一方、大本教は1923年、教団内にエスペラント普及会を設立し、日本エスペラント大会にも参加するようになった。エスペラント語による宣教用文書も多数つくられている[おほもと公式ホームページ]。エスペラント語を仲介にして、何盛三と大本教が接点をもったことはおおいに可能性がある。また盛三の仲間であった満川亀太郎は、1926年11月27日に人類愛善協会で講演をおこなっており[満川2011:87]、大本教とのつながりがあった。盛三や満川そして陳福安などを通して、大本教からファン・ボイ・チャウまでつながったので

はないだろうか。1936年に大本教がカオダイ教と連携するようになったのも、そのルートを使って関係構築がはかられたのではないかと思われる。

新聞記事「この事実を見よ 救主の再臨を待つ 越南三千万の東洋民族」に戻るが、この記事は短いものの内容は以下で扱う『滅種予言』に似ている。どのような経緯でチャウがこの記事を寄稿するようになったのかは依然として不明であるが、上で検討してきたように、寄稿までの経緯を考えると日本のアジア主義者との人脈的つながりが感じられる。内容的には白色人種、黄色人種といった「人種」の区別が残っている。しかし『連亜蕪言』や『亞洲之福音』に見られたような明確なアジア連帯の主張はもはやされていない。この記事は1920年代末のチャウにおいてアジア連帯の痕跡を窺わせるものの、連帯の主張が希薄になっていることを示すものだと考えられる。1931年の満州事変によって日中関係が決裂したことによって、日中を中軸としたチャウのアジア連帯論は完全に潰えたのではないかというのが筆者の見立てである。

#### 2.4. ファン・ボイ・チャウにおける社会主義的連帯

第三にソ連、ひいては社会主義的な国際連帯である。1920年にチャウは北京でソ連訪華使節団長らと会見し、留学生をソ連に送り出すことを検討しており、社会主義国との連帯も選択肢の一つにあったと思われる。ただしその後の具体的動きはない。1925年に中国でグエン・アイ・クオック (Nguyễn Ái Quốc : 1890 – 1969. 後のホー・チ・ミン) と会見する予定であったが、その直前に上海で逮捕されてしまった<sup>10</sup>。ベトナム国内で共産主義団体が結成されるのは、チャウのフェ軟禁以降である。したがってチャウは共産主義運動に直接関与することはなかった。しかしフェの自宅にはレーニンの肖像が掲げられていたといわれ、チャウは社会主義への関心を持ち続けていたことが分かる。チャウの社会主義への関心がうかがえる主な著作としては次のようなものがある。①「レーニン伝、赤色ロシアの偉人」(1921年)[Toàn Tập 5 2011 : 318-323]。戦略家で人心収攬に巧みであり、労農国家を樹立したレーニンを讃えたもの。しかしこの著作からは、ホー・チ・ミンが大きな影響を受けたレーニンの著作「民族・植民地問題に関するテーゼ」を読んだ痕跡はうかがえない。②『空中縁』(1923年)[Toàn Tập 4 2011 : 133-213]。アメリカとソ連を舞台にした漢文小説。主人公の安琪儿 (エンジェル) はアメリカに住んでいたが、無政府主義の本を所持していたために、追放され、フランスを經由してソ連に行き、満たされた生活を送り、コミンテルンに加入するというソ連礼賛の小説。③『ファム・ホン・ターイ伝』(1924年)[Toàn Tập 5 2011 : 337-369]。ファム・ホン・ターイのメルラン総督暗殺未遂事件に触発されたもので、全国の人口の4分の3を占める労働者と農民の階級に依拠した「社会革命」を唱えるようになり、チャウは再び暴力革命・テロリズム路線を採るようになった。④『社会主義』(執筆年不明。1928～1936年)[Toàn Tập 7 2011 : 131-172]。社会主

義の理論を紹介したもの。チャウは、「家族主義」「資本主義」「国家主義」を乗り越えるものとして社会主義の登場を歓迎し、マルクスの学説を真正な社会主義だと認定し、人類の最も素晴らしい理想であるとした。しかし彼は「虚無主義」、「無政府主義」も社会主義だとし、マルクスと孫文の関係を孔子と孟子の関係のようだとみ三民主義をも社会主義に取り込み、マルクスの思想は孔子の大同思想を発展させたにすぎないとみた。チャウの社会主義の見方は道徳主義的であり、階級闘争が歴史の推進力との観点や弁証法的唯物論には触れられず、国家の死滅の展望も示されていなかった。⑤『孔学燈』(1929～1935年頃)[Toàn Tập 10 2011]。儒教の学説史を古代から現代まで辿った大部の研究で、チャウは、西洋の民主主義や社会主義の学説は孔子や孟子の学説に含まれており、東洋の学説は西洋の学説に負けていないことを力説する。社会主義の真精神は大同であり、大同とはつまり「最大の公の道理」だとした。⑥「階級闘争問題に関して」(『長安』紙 1938年10月7日付け)[Toàn Tập 7 2011 : 517-519]で、ベトナムの資本家はフランス人であって階級矛盾よりも民族矛盾が問題だとし、ベトナムでの運動における階級闘争を否定した。これによってチャウは、フランスをベトナムの単に「人種的」敵としてではなく、階級的敵としても捉えるようになったといえる。以上のようなチャウの社会主義に対する考えは、ベトナム国内の評価では、科学的社会主義であるマルクス・レーニン主義に至る以前のもだとされている[Chương Thâu 2012 : 299]。これに対し、ドイツの研究者ウンゼルト博士は、彼が発掘したチャウの著作『滅種予言』[Toàn Tập 7 2011:227-310]に基づき、チャウの思想が封建的イデオロギーからマルクス主義イデオロギーに転換したとする[Châu 1991 : 19]。以下では、この『滅種予言』について少し詳しく検討していきたい。

『滅種予言』は執筆年不明である。この著作はチャウの生前には公刊されておらず、1980年代にドイツのウンゼルト博士によってそのタイプ原稿が発見されたものである。この著作の序文に「トルコは9年前に独立した」とあるところから、ウンゼルト博士は執筆時期を1929年頃としている。それに対しチュオン・タウはフランス人民戦線内閣成立以降の風潮の影響が見られるところから1936年以降と考えている。またディン・スアン・ラムは著作中で言及されている中部の「学会」解散が1937年4月なのでそれ以降としている[Châu 1991 : 13-43]。三人の説には一長一短があり、どちらも納得のいかない部分がある。この著作の前半の散文部分であるが、若干の新しい事実が加えられているほかは内容に新味がなく、フランスによる「滅種」の手段という『ベトナム亡国史』や『天乎！帝乎！』に使われているモチーフの焼き直しである。後半の韻文部分の第九章「保種長歌」はチュオン・タウも指摘するように「平民詩」がたくさん作られるようになるなど、人民戦線の影響も見られることから1936～38年にかけてつくられたのではないかと思われる。つまり散文部分は比較的早く1930年前後に執筆が開始され、韻文部分は最晩年に完成したのではないかと筆者は考えている。

『滅種予言』はベトナムの「滅種」の危機をフランスによる宗教・政治・教育・経済・陰謀詭計の各分野での手段を暴き、ソ連に労農国家が樹立され、「ロシア労農を師とした」、反資本主義・帝国主義の風潮が世界的に高まっているとし、労働者・農民・学生・女性・兵士・キリスト教信徒に起ちあがるよう呼びかけている。この著作で注目すべき点は次の通りである。①農民に関しては「農党」の旗を掲げることがうたわれているのに対し、労働者の方には特にそういった言及はされず、「労働者階級の党」という文言は出てこないこと。②「土と農が仲間になって、労働者を導き、困窮を脱する」、「しっかりした組織をつくるのが第一歩」とされ、ベトナム革命の中心的担い手は知識人・農民と考えられていること。③フランスと対抗するのに、華越同盟論が唱えられていること。④「五洲の大同」「黄・白・黒・紅色人ともに幸福になり、その時、大同の旗ひるがえる」と世界革命が漠然と目指されていること、である。『滅種予言』においてチャウの視野はアジアから世界の無産階級・労農国家へと広がっていることが見て取れる。しかしチャウには個別的なフランス植民地主義への批判はあるが植民地主義一般の批判にまで昇華することはなく、世界革命への展望は曖昧なものに終わっている。チャウの社会主義は、チュオン・タウが指摘するようにマルクス・レーニン主義には至っていないかも知れないが、人口の圧倒的多数が農民で工業が未発達で労働者の割合が少なく、市民社会が未形成で儒教的身分制が根強い社会で育まれた東アジア的な社会主義とっていいであろう。このようなチャウの社会主義はホー・チ・ミンのそれとも決して無関係ではない。

以上、『滅種予言』の内容について検討してきたが、フランスを敵視するこの著作と先で見た仏越提携論とは執筆時期もほぼ重なり、その整合性をどう考えたらいいのであろうか。チャウの仏越提携論が発表されたのはベトナム内の公刊物であるのに対し、『滅種予言』はチャウの生前は非公刊物であった(ちなみに『社会主義』、『孔学燈』もそうである)。だとするならば、チャウにおいて仏越提携論はいわば「顕教」として、社会主義運動論・華越同盟論はいわば「密教」として併存していたのではなかろうか。ベトナムの「滅種」の危機を脱し将来の独立を達成するために、日本の脅威の観点からは仏越提携論が、フランスの脅威の観点からは社会主義運動・華越同盟論が唱えられていたのではないかとと思われる。

## おわりに

20世紀初頭のベトナムにおける代表的な民族運動家であるファン・ボイ・チャウは日本を追放され、東遊運動が挫折した後も、日中合作論を中心とするアジア連帯を唱えていた。第一次世界大戦が終わると、一転して仏越提携論を唱えるようになった。1920年代のチャウは、社会主義をはじめ、さまざまな思想的傾向が窺えるが、アジア連帯の考えは希薄になっていった。晩年には、「顕教」としての仏越提携論と「密教」としての社会主義運動論・華越同盟論が

考えられていた。

## 注

- 1) 1990年代以降、チャウの「暴動」的側面は「改良」的・啓蒙的側面と並行していたことを強調する見解が出され、維新会もそれに対応した2つの組織(明社と暗社)があったとされる[Lương Chí Minh 1994][Hồ Song 1997, 1998]など。1907年にハノイで展開された啓蒙的教育・文化活動であったドンキン義塾の創立について、ファン・ボイ・チャウの役割を重視する見解[Đinh Xuân Lâm 2007][Chương Thâu 2007]と、ファン・チュー・チンの役割を重視する見解[Arakawa 2003]に分かれている。前者の見方からすると、ドンキン義塾は単なる教育・文化機関であったのではなく、武装蜂起とも密接な関わりをもっている点が強調される。
- 2) 記事を探し当てるに際して、チュウオン・タウ氏と青山治世氏から助言を受けた。記して謝意を表したい。
- 3) ベトナムの研究者グエン・ティエン・ルックによれば、チャウは日本の政治家に不信と失望感をもっていたが、東亜同文会の柏原文太郎に対しては異なり、1915年と1924年にチャウは柏原に手紙を送っている[Lực 1996: 68-78]。またチュオン・タウによれば、東遊運動は結局、日本政府から弾圧されたが、一方で、浅羽佐喜太郎、柏原文太郎、宮崎滔天など、日本の民間人から支援を受けた。それで1918年、チャウはグエン・ターイ・パットと共に再来日した。1916年、チャウは中国から柏原に手紙を出し、根津一、恒屋盛服によるしくと感謝の手紙を送っている[Chương Thâu 2005: 20 - 21]。
- 4) チャウのアジア連帯主義に対する Youn の評価は、「利己的民族主義」であったと批判的である。また彼の指摘によれば、チャウの『越南亡国史』を読んだ当時の朝鮮人知識人はチャウのアジア大団結説に批判的で、チャウが柏原文太郎、福島安正らの膨張主義の人物たちと交流し、吉田松陰、西郷隆盛、福沢諭吉のような朝鮮への膨張を主張した人物を称賛したことを批判したという。チャウの「自大的傾向」については筆者も指摘したことがある[今井 2008: 182]。しかしチャウの「愛国主義」は閉鎖的なのではなく、国際的な連帯を伴うものであったことは重要だと考える。
- 5) これまでベトナムで出版されてきた『自判』では、『全集』を含めて、原著の作者を「Fuse Tatsuji」(布施辰治)と注釈してきた。これに対し、[Liên và Lê 1991: 74-75][白石 1993: 659][Vinh Sinh 1999: 246]では、布施勝治だとしている。[今井 2006]では、布施辰治でないことは明確であるが、布施勝治にも若干の疑問が残ることを指摘している。
- 6) [産経 2001: 214][Lâm 2015: 524]などでは、若き日のヴォー・グエン・ザップ (Võ Nguyên Giáp: 1911 - 2013) がフェエで軟禁されているチャウの家を度々訪れていたことが指摘されている。またフェエにあるファン・ボイ・チャウ記念館の展示では、ヴォー・グエン・ザップ以外にも、レ・ズアン (Lê Duẩn: 1907 - 1986)、グエン・チー・ジエウ (Nguyễn Chí Diểu: 1908 - 1939)、チャン・フイ・リュウ (Trần Huy Liệu: 1901 - 1969)、トン・クアン・フィエット (Tôn Quang Phiết: 1900 - 1973) などの革命運動家が若い頃、チャウの話聞きに家を訪れていたとされている(2017年3月の時点の展示)。チャン・フイ・リュウ、トン・クアン・フィエット、ダオ・ズイ・アイン (Đào Duy Anh: 1904 - 1988) などは[Nhiều Tác Giả 1982]にチャウとの交流の思い出を綴っている。
- 7) 安間幸甫氏は、南溟生を上海総領事で横浜正金銀行取締役だった小田切万寿之助(1868 - 1934)だと推定している[安間 2017: 16]。この論考では、小田切と何盛三とは米沢人脈でつながっていると指摘されている。
- 8) Võ Hoàng Phong によれば、Trần Phúc An は別名で、Trần Văn An, Trần Huy Thánh ともいい、1897 - 1941年。Vĩnh Long の出身。Võ Hoàng Phong, ' Các nhân vật người Vĩnh Long trong Phong trào Đông Du ' <http://nghienquoccte.org/2017/04/16/nguoi-vinh-long-trong-phong-trao-dong-du/> (2017年10月1日最終閲覧)。ファム・ホン・トゥンによれば、チャン・ヒー・タイン (Trần Hy

Thánh、別名 Trần Văn Ân, Trần Phúc An) は 1908 年に 10 歳で東遊運動に参加した。クオンデの側近で 1940 年にベトナム復国同盟会の外交委員になり、同年に広東に赴き日本軍と接触し、建国軍を組織。42 年にはベトナム南部でカオダイ教と接触するなどして支部を結成。1943 年には日本軍によりシンガポールに送られたという [Tung 2003 : 3-16]

- 9) 陳福安は、劇作家・エスペランチスト・社会主義者であった秋田雨雀 (1883 - 1962) とも交流があった。1919 年 10 月 19 日の日記に秋田はこう書いている。「けさ、大杉君からの紹介の安南人陳君がきた。鳴海、藤森の三君といっしょに安南の話をした。民族自決主義にしげきされてフランス国会に建議文を送るその仏文をポール・リシャールにたのんでくれということであった」[尾崎 1965 : 198]
- 10) この時、ファン・ボイ・チャウはグエン・アイ・クオックと実際に会ったのかどうか、またチャウをフランス官憲に「売った」のは誰かについては、諸説ある。[Vinh Sinh 1997]によれば、二人が会っているとする研究者はホアイ・タイン (Hoài Thanh) で、会っていないとする研究者はフランスのジョルジュ・ブダレル (Georges Boudarel)、ヴィン・シン自身である。また首謀者についてヴィン・シンは、クオン・デの回想記では主犯はラム・ドゥック・トゥだとしているが、ラム・ドゥック・トゥ (Lâm Đức Thọ) とグエン・トゥオン・フエン (Nguyễn Thượng Huyền) の二人が関与しているとしている。チュオン・タウは [Chương Thâu 2012 : 326] で、チャウとクオックは会っていないとしており、[Chương Thâu 2000 : 94] で、ラム・ドゥック・トゥの関与を否定している。ベトナム国内で発行されているホー・チ・ミンの伝記のなかで、[Đặng Hòa 1900 : 67-68] は二人が邂逅する場面を描写している。また [産経 2001 : 225] によれば、アメリカの研究者マカリストはホー・チ・ミンを首謀者だとしている。

## 参考文献

(著作)

Chương Thâu sưu tầm và biên soạn 1990

*Phan Bội Châu Toàn Tập*, Tập 1~10, Huế, Nhà Xuất Bản Thuận Hóa

Chương Thâu sưu tầm và biên soạn 2001

*Phan Bội Châu Toàn Tập*, Tập 1~10, Huế, Nhà Xuất Bản Thuận Hóa, Trung Tâm Văn Hóa Ngôn Ngữ Đông Tây.

——— 2012

*Phan Bội Châu (1867-1940) Nhà Yêu Nước Nhà Văn Hoá Lớn*, Hà Nội, Nhà Xuất Bản Văn Hóa – Thông Tin

Đặng Hòa 1990

*BÁC HỒ những năm tháng ở nước ngoài*, Hà Nội, Nhà Xuất Bản Thông Tin

Đình Xuân Lâm 2015

*Phong Trào Chống Chủ Nghĩa Thực Dân Ở Việt Nam*, Hà Nội, Nhà Xuất Bản Giáo Dục Việt Nam

Nguyễn Q. Thắng 1992

*Phan Châu Trinh Cuộc Đời Và Tác Phẩm*, Thành Phố Hồ Chí Minh, Nhà Xuất Bản Văn Học

Nhiều Tác Giả 1982

*Ông già Bến ngụy Hồi Ký*, Huế, Nhà Xuất Bản Thuận Hóa

Phan Bội Châu 1991

*Chứng Diệt Dự Ngôn (Lời Dự Đoán Về Sự Diệt Chúng)*, Hà Nội, Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội

——— 2001

*Phan Bội Châu Niên Biểu*, Thành Phố Hồ Chí Minh, Nhà Xuất Bản Văn Nghệ TP. Hồ Chí Minh

Trần Văn Giàu 1975

*Sự Phát Triển Của Tư Tưởng Ở Việt Nam Từ Thế Kỷ XIX Đến Cách Mạng Tháng Tám*, Tập II, Hà Nội, Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội

Vinh Sinh & Nicholas Wickenden 1999

*Overtured Chariot The Autobiography of Phan-Boi-Chau*, Honolulu, University of Hawaii Press  
Vũ Ngọc Khánh 2012

*Phan Bội Châu*, Hà Nội, Nhà Xuất Bản Văn Hóa – Thông Tin  
青山治世・関智英編 2017

『「順天時報」社論・論説目録』公益財団法人・東洋文庫  
岩崎育夫 2017

『入門 東南アジア近現代史』講談社現代新書  
満川亀太郎 2011

『満川亀太郎日記』論創社  
宮崎滔天・内田良平・西田税・大川周明 1982

『日本人の自伝 11』平凡社  
長岡新次郎・川本邦衛編 1966

『潘佩珠著 ヴェトナム亡国史 他』平凡社  
中島岳志 2014

『アジア主義—その先の近代へ』潮出版社  
尾崎宏次編 1965

『秋田雨雀日記』第一巻、未来社  
産経新聞「20 世紀特派員」取材班 2000

『20 世紀特派員 1』扶桑社文庫  
白石昌也 1993

『ベトナム民族運動と日本・アジア』巖南堂書店  
—— 2012

『日本をめざしたベトナムの英雄と皇子 ファン・ボイ・チャウとクオン・デ』彩流社  
内海三八郎 1999

『ヴェトナム独立運動家 潘佩珠伝 日本・中国を駆け抜けた革命家の生涯』芙蓉書房出版  
山室信一 2001

『思想課題としてのアジア 基軸・連鎖・投企』岩波書店

(論文)

Chương Thâu 2000

“Về Việc Sưu Tầm Tài Liệu Phan Bội Châu Tại Pháp” *Nghiên cứu Lịch sử*, Số 1:93-96.

—— 2005

“Về Đội Ngũ Lưu Học Sinh Việt Nam Trên Đất Nhật Bản Đầu Thế Kỷ XX” *Nghiên cứu Lịch sử*, Số 12:9-23

—— 2007

“Từ Khánh Ứng Nghĩa Thực Ở Nhật Bản Đến Đông Kinh Nghĩa Thực Ở Việt Nam” *Nghiên cứu Lịch sử*, Số 2:7-14.

DAE-YEONG YOUN 2009

“Nhận Thức Về Đông Á Của Trí Thức Việt Nam Vào “Thời Kỳ Quá Độ” – Tập Trung Phân Tích Về Ý Thức Liên Đới Và Chủ Nghĩa Dân Tộc Tự Vị” *Nghiên cứu Lịch sử*, Số 1:39-49

Đình Xuân Lâm 2007

“Những Hoạt Động Của Việt Nam Quang Phục Hội Trên Địa Bàn Hà Nội Đầu Thế Kỷ XX” *Nghiên cứu Lịch sử*, Số 2:3-6, 44.

Hồ Song 1995

“Phan Bội Châu Và Phong Trào Đông Du (1)” *Nghiên cứu Lịch sử*, Số 4:85-88

—— 1997

“ Đông Kinh Nghĩa Thục Trong Phong Trào Duy Tân Ở Việt Nam Vào Đầu Thế Kỷ XX ” *Nghiên cứu Lịch sử*, Số 6:67-72.

—— 1998

“ Đông Kinh Nghĩa Thục Trong Phong Trào Duy Tân Ở Việt Nam Vào Đầu Thế Kỷ XX (Tiếp Theo Và Hết) ” *Nghiên cứu Lịch sử*, Số 1:23-32

Lương Chí Minh 1994

“ Nghiên Cứu So Sánh Phan Bội Châu Với Phan Chu Trinh ” *Nghiên cứu Lịch sử*, Số 1:81-89.

KEN ARAKAWA 2003

“ Vài Suy Nghĩ Về Đông Kinh Nghĩa Thục Và Fukuzawa Yukichi (Phúc Trạch Dụ Cát) ” *Nghiên cứu Lịch sử*, Số 3:87-93

Nguyễn Đình Chú 2008

“ Về Phan Bội Châu – Mấy vấn đề xin được bàn lại... ” *Nghiên Cứu Văn Học*, Số 4:15-27.

Nguyễn Tiến Lực 1994

“ Phong Trào Lưu Học Của Thanh Niên Việt Nam Ở Nhật Bản (1905-1909) ” *Nghiên cứu Lịch sử*, Số 1:19-29

—— 1996

“ KASHIWABARA BUNTARO Với Phong Trào Đông Du Việt Nam (1905-1909) ” *Nghiên cứu Lịch sử*, Số 6:68-78

Phạm Hồng Tung 2003

“ Về Cường Để Và Tổ Chức Việt Nam Phục Quốc Đồng Minh Hội Trong Thời Kỳ Thế Chiến II ” *Nghiên cứu Lịch sử*, Số 3:3-16

Phan Ngọc Liên – Nguyễn Đình Lê 1991

“ Điều Tra Chân Tướng Nga La Tư ” *Nghiên cứu Lịch sử*, Số 3:74-75

Vĩnh Sinh 1992

“ Quan Niệm Về Độc Lập Quốc Gia Của Việt Nam Và Nhật Bản: Trường Hợp Phan Bội Châu Và FUKUZAWA YUKICHI ” *Nghiên cứu Lịch sử*, Số 6:17-34

—— 1997

“ Về Mối Liên Hệ Giữa Phan Bội Châu Và Nguyễn Ái Quốc Ở Trung Quốc (1924-1925) Giới thiệu tài liệu mới phát hiện ” *Nghiên cứu Lịch sử*, Số 3:44-52

安間幸甫 2017

「何盛三 その二 (赤松家の米沢人脈から見えてきたもの)」『磐南文化』No.43, pp.11-21.

今井昭夫 1992

「ファン・ボイ・チャウの『社会主義』をめぐる」『東京外国語大学論集』45, pp.237-250.

—— 1997

「フェ時代のファン・ボイ・チャウの思想」『東京外国語大学論集』54, pp.61-72

—— 2006

「ファン・ボイ・チャウの日本滞在経験とその思想形成」『東京外大 東南アジア学』第11巻. pp.80-86

—— 2008

「20世紀初頭のベトナムにおける開明的儒学者たちの国民国家構想」久留島浩・趙景達編『アジアの国民国家構想 近代への投企と葛藤』青木書店. pp.149-188.

宮沢千尋 2005

「再来日後のベトナム東遊運動盟主クオンデ侯をめぐる日仏植民地帝国の対応と取引 東遊運動瓦解後のクオンデの思想と行動(4)」『ベトナムの社会と文化』5・6号. pp.115-150

白石昌也 1981 a

「滞日期のファン・ボイ・チャウ（ベトナム）と雲南省活動家との交流」『東洋文化研究所紀要』85。  
pp.37-105.

—— 1981 b

「東遊運動期のファン・ボイ・チャウ—渡日から日・中革命家との交流まで」永積昭編『東南アジアの留学生と民族主義運動』巖南堂。pp.229-310.

—— 1982

「明治末期の在日ベトナム人とアジア諸民族連携の試み —「東亜同盟会」ないしは「亜洲和親会」をめぐって—」『東南アジア研究』20 卷 3 号。pp.335-372.

—— 2013

「ファン・ボイ・チャウ —ベトナムの社会ダーウィニスト」趙景達・原田敬一・村田雄二郎・安田常雄編『講座 東アジアの知識人 第 2 卷 近代国家の形成』有志舎。pp.82-99

内海和夫 2006

「忘れられたベトナムの古き友—曾根俊虎 (1847 - 1910) と何盛三 (1885 - 1951) について」『東京外大 東南アジア学』第 11 卷。pp.77-80.

(データベース)

アジア歴史資料センター 1909 (明治 42 年)

「安南王族本邦亡命関係第一巻」REEL No. A-1012

—— 1922 (大正 11 年)

「日本エスペラント弁務局 設立趣旨」REEL No.3-2546

—— 1926 (大正 15 年)

陳福安「仏国統治下に於ける越南国情」REEL No. 1-0304

—— 1930 (昭和 5 年)

要視察人関係雑纂 本邦ノ部 第二卷 I -0826.

(ホームページ)

<http://nghiencuuquocite.org/2017/04/16/nguoi-vinh-long-phong-trao-dong-du/>

(最終閲覧日 2017 年 10 月 1 日)

<http://www.oomoto.or.jp/japanese/index-j.html> (最終閲覧日 2017 年 10 月 1 日)

